COLUMN ｜ 業務効率化 ｜ 株式会社DnD

仕様書をAIに書かせたら、打ち合わせが変わった

システム発注の"準備"にAIを活かす3つのステップ

「作ってもらったのに、思っていたのと違う」「追加費用がかさんだ」——こうした後悔の多くは、発注前の要件定義の曖昧さに起因します。本資料では、ChatGPTやClaudeを使って仕様書の叩き台を作り、開発会社との認識ギャップを減らすための3つのステップを図解・解説します。

株式会社DnD ｜ https://dnd-inc.jp/

SUMMARY — この資料の要点

- システム開発トラブルの多くは「要件の曖昧さ」が原因。AIとの対話で情報を引き出せる。
- 3ステップ：①業務をAIと対話しながら言語化 → ②AIに叩き台を生成させる → ③非機能要件と優先順位を自分で追加。
- AIは「言葉にするサポート」役。業務の文脈・判断は人間が担う必要がある。

なぜ「伝えたはずなのに違う」が起きるのか

システム開発の発注は、多くの中小企業にとって日常的な業務ではありません。意図を伝えているつもりでも、開発会社との言葉の定義や前提の違いが積み重なり、完成後に「思っていた

のと違う」という事態につながります。

- 「検索できるように」→ 開発者は「IDで検索できる機能」と解釈、自由検索ではなかった
- 「承認フロー」→ 3段階を想定していたが、1段階で作られた
- 「外部連携」→ API仕様確認コストを考慮しておらず追加費用が発生

こうしたすれ違いを防ぐ最善の方法は、「何を作るか」を開発前に言葉で徹底的に明文化することです。AIはその言語化プロセスを大きく支援します。

ステップ1：業務をAIと対話しながら言語化する

まず、現場の言葉で「解決したい問題」と「やりたいこと」を箇条書きにします。完璧でなくて構いません。次にAIに渡し、以下の質問を生成してもらいます。

- 「このシステムを使う人は誰ですか？どんな場面で使いますか？」
- 「管理したいデータの種類を教えてください」
- 「既存システムとの連携が必要ですか？」

質問に答えながら業務を整理することで、自分でも気づいていなかった要件が浮かび上がります。このフェーズは「AIに書かせる」ではなく「AIと話しながら自分の頭を整理する」プロセスです。

ステップ2：AIに要件の叩き台を作らせる

ステップ1で整理した内容をAIに渡し、「①目的 ②利用者 ③管理データ ④必要機能 ⑤外部連携 ⑥セキュリティ要件」の順で要件定義の叩き台を作ってもらいます。

> *生成された内容は鵜呑みにせず、「業務の実態と合っているか」を必ず自分でレビューしてください。AIは一般的に「ありがちな機能」を盛り込む傾向があります。*

よくあるAIの注意点：過剰な機能の盛り込み、実態と異なるデータ属性、根拠のないパフォーマンス要件が入ることがあります。

ステップ3：非機能要件と優先順位を追加する

AIが作る叩き台は「何ができるか（機能要件）」に偏りがちです。渡す前に以下を自分で確認・追記します。

- **パフォーマンス**：同時接続ユーザー数・1日のデータ登録件数・将来のスケール
- **セキュリティ・アクセス権限**：誰がどのデータを見られるか・編集できるか
- **保守・運用**：完成後の管理者・バックアップ頻度・引き継ぎのしやすさ
- **予算と優先順位**：「必須機能」と「あれば嬉しい機能」の区別・フェーズ分けの希望

AI仕様書で変わること・変わらないこと

変わること：打ち合わせの焦点が「何を作るか」から「どう作るか」に移る。認識のズレを早期に発見できる。見積もり精度が上がる。

変わらないこと：「なぜその業務があるのか」の業務の文脈は、発注者自身が持つ必要がある。AIは言語化をサポートするが、業務の意図や優先判断は人間にしかできない。

株式会社DnDのご支援について

要件定義の壁打ちから開発・運用まで、中小企業のシステム構築を一貫してサポートします。「何から手をつければいいか分からない」という段階からでも歓迎です。

お問い合わせ・相談（無料）：https://dnd-inc.jp/contact.html